

『帝国主義』論に学ぶ

第10回

東京ブロック

第十章 帝国主義の歴史的地位

司会 今回は、本書の全体的まとめにあたる第十章「帝国主義の歴史的的地位」です。レポーターは、東京南部県協会長の千葉愛一郎さんです。

よろしくお願いします。

帝国主義と日和見主義の

むすびつきがつくられる

千葉レーニンは、帝国主義は①「独占資本主義」、②「寄生的な、または腐敗しつつある資本主義」、③「死滅しつつある資本主義」という三つの面で、資本主義の「特殊な歴史的段階」

であると捉えています。①については、第一章「生産の集積と独占」から第七章「資本主義の特殊の段階としての帝国主義」で詳しく述べられていました。②は第八章「寄生性と資本主義の腐朽化」で究明されています。

一例を挙げますと、第八章172頁から173頁にかけて「帝国主義は、労働者のあいだでも、特権を持つ部類を遊離させ、これをプロレタリアートの広汎な大衆から引きはなす、という傾向をもっている」という記述がありますが、連合の芳野会長が「安倍元首相」の国葬に参列するという態度は、

このレーニンの指摘の正しさを裏付けるものとなっています。帝国主義のこの傾向は、とくに注意しなければなりません。それ故に、レーニンは第十章においても「資本家によって独占的高利潤が獲得されることは、労働者の個々の層を買収し、もつともそれは一時的にであり、またかなり少数のものであるが、それらの労働者を、その他のすべての労働者に対立させて、当該部門あるいは当該国のブルジョワジーのがわにひきつける経済的可能性を、彼ら資本家にあたえる。そして、世界分割をめぐる帝国主義諸国の敵対関係

◆みんなの学習講座



著者のレーニン

レーニンは、独占資本主義が「歴史的過渡期」(201頁)であるという認識に立っています。「独占は、資本主義制度からより高度の社会へ経済制度への過渡だからで

本書の主題は「帝国主義の歴史的的地位」です。このことを考える前提としてレーニンは、独占資本主義が「歴史的過渡期」(201頁)であるという認識に立っています。「独占は、資本主義制度からより高度の社会へ経済制度への過渡だからで

の激化は、この傾向を強める。こうして、帝国主義と日和見主義の結びつきがつくりだされる」(202〜203頁)と各押ししているのです。
このように、第十章は、本書全体のまとめですから、はじめに、①と②の要約が行われている(199頁〜203頁15行目) わけです。

帝国主義の歴史的的地位とは、

社会主義革命の前夜

ある」(199頁)と「奴隷の言葉」で語っていることからもおわかりいただけると思います。「高度な社会へ経済制度への過渡」の「過渡」とは帝国主義のことであり、「高度な社会へ経済制度へ」とは社会主義制度のことです。

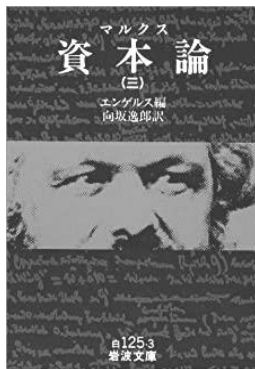
資本主義に始まりと終わりがあるように、帝国主義にも始まりと終わりがあるということですが、「帝国主義は、その経済的本質からすれば、独占資本主義である」(199頁)ということによって資本主義の終焉「死滅しつつある資本主義」(203頁)が規定されていると述べられています。つまり、帝国主義の歴史的的地位とは、「高度な社会へ経済制度への過渡」すなわち社会主義革命の前夜ということですが、この結論を、レーニンは『帝国主義』論の中で立証したのです。

レーニンは、マルクス・エンゲルスの思想を正しく受け継いだ人物です。

レーニンが本書の中で導き出した社会主義革命の前夜という結論は、マルクスが「資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の極端(しごく)となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは、調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される」(岩波文庫版『資本論』第三分冊415頁)と述べていますが、このことを受けたものです。

新しい社会秩序に

引きずりこまれる資本家たち



ところで、どういう意味で「過渡期」かについては、すでに第一章や第七章で学びました。思い起こしていただくために、本文から一、二引用します。

「資本主義は、その帝国主義的段階において、生産のもっとも全面的な社会化にびつたりと接近する。それは、いわば、資本家たちを、彼らの意思と意識とに反して、競争の完全な自由から完全な社会化への過渡をなすある新しい社会秩序にひきずりこむ」（43頁）

「資本主義は、その発展の一定の、きわめて高度の段階で、すなわち資本主義の若干の基本的属性がその対立物に転化しはじめたときに、資本主義からより高度の社会Ⅱ経済制度への過渡時代の諸特徴があらゆる方向にわたって形づくられ、あらわになったときに、はじめて資本主義的帝国主義となったのである。この過程で経済的に基本的なのは、資本主義的な自由競争が資本主義的な独占にとつてかわられたこと

である。自由競争は資本主義・・・の基本的属性であり、独占は自由競争の直接的対立物である」（144頁）。

この「過渡期」は資本主義の枠内における「資本主義の特殊な段階」としての「過渡期」であるが、この二つの引用文が「過渡期」の内容を言い表しています。

レーニンは「独占は、資本主義制度からより高度の社会Ⅱ経済制度への過渡」（199頁）ということから、帝国主義を「死滅しつつある資本主義」（203頁）として特徴づけ、この特徴こそが帝国主義の「歴史的地位」であると述べています。

資本主義は自動崩壊しない、 革命を経て社会主義に移行

だが、帝国主義は「死滅しつつある資本主義」であるからといって、「帝国主義、独占資本主義の内部で、社会

主義への移行がすでに始まっている」ということではなく、帝国主義による労働のおおがかりな社会化によって社会主義の物質的基礎、物質的前提条件が成就しているということにほかならないのであり、**資本主義は自動崩壊しません**。「収奪者が収奪される」という革命を経て社会主義に移行するので

す。

帝国主義が「より高度の社会Ⅱ経済制度への過渡」だということは、帝国主義と社会主義の間には、カウツキーの「超帝国主義」の段階のような中間段階も存在しません。レーニンが本書の「序言」で述べているように「帝国主義が社会主義革命の前夜である」（12頁）ということですよ。

司会：千葉さんレポートご苦労様でした。何か質問ありますか。

◆みんなの学習講座



■ロシア軍が進軍した地域

ロシアのウクライナ侵攻はなぜ起きたのですか

齊藤 戦後77年目にして、ロシアのウクライナ侵攻がおきています。この侵攻は、世界市場の再分割を意図したロシア帝国主義とアメリカを盟主とする

欧州帝国主義各国との戦争と見てよいのでしょうか。また、なぜ起きたのでしょうか。

千葉 第二次世界大戦後は、「社会主義」「民族解放闘争」「国内の労働者階級の闘い」という、三つの反帝国主義勢力の伸長が目覚ましく、帝国主義諸国家の直接的な政治的・軍事的対立が抑制されてきました。むしろアメリカを盟主として、途上国を共同で搾取し、支配する帝国主義同盟が成立し、社会主義世界体制と対峙する道が選択されたのです。いわゆる冷戦時代です。

しかし、1991年に社会主義ソ連邦が崩壊し、雪崩的に社会主義世界体制も崩壊、縮小して今日に至っています。この世界史の延長線上に、ロシア・ウクライナ戦争を位置付けて分析する必要があります。

世界市場の再分割を意図したアメリカを盟主とする欧州各国の帝国主義同

盟とロシア帝国主義の戦争という様相を呈している現状ではないでしょうか。この戦争の原因は、三つの反帝勢力の世界的な弱体化と資本主義の特徴である発展の不均衡性が避けられないことによる帝国主義間の対立と闘争が、戦争となったということです。

小泉 資本主義は自動崩壊せず、革命を経ることなしには社会主義社会は実現しないということですが、革命の担い手はだれで、だれを倒すのでしょうか。

千葉 確認の意味での質問だと思いますが、担い手は労働者階級です。敵は打倒する相手は資本家階級です。

秦 第三章66頁に「この最新の資本主義がどのようなものに『移行する』か、…の問題を提起することを、ブルジョア学者たちはおおそおそと書かれています。ブルジョア学者は何をおそれたのですか。

千葉 その答えは、第十章でレーニン

が解き明かしていますが、結論は、革命を経て社会主義に「移行」するということとを解明され、労働者階級に浸透するのをおそれたということです。

日本資本主義の階級闘争の

現状はどつなっていますか

斎藤：ところで、日本の資本主義社会の階級構成と階級闘争の現状はどのようになっていますか。

千葉：帝国主義段階である日本を説明すると、「こんにち、日本の国家権力を握っているのは、日本の独占資本とそれをとりまく政治家・官僚の一握りの勢力である。有業人口の0・1%にもならない独占資本家階級によつて約80%を占める労働者階級と、小零細資本、農・漁民、その他あわせて95%以上の圧倒的多数の階級が支配されている」（『勝利の展望／2017／社会主義協会新テーゼ』補強

版）』という支配、被支配の階級関係になっています。

「マルクスは労働者が『価値』を生産する。全労働者が一日でも労働を止めたら、社会は崩壊する」（『社会を変える、自分を変える』坂牛哲郎著 労働大学発行）と書かれている通り、主人公である80%を占める労働者階級が0・1%にも満たない独占資本家階級によつて搾取され支配されているのが今日の社会です。

実質賃金が25年間

下がり続ける日本

小泉：具体的に説明してください。

千葉：政府統計によれば、1989年非正規雇用労働者の割合が19・1%であったものが、2019年の非正規雇用労働者の割合は、雇用者全体（6004万人）の約40%（2165万人）と2倍に達し、その平均年収は男性で

226万円（正規男性561万円）、女性で152万円（正規女性389万円）です。まさに、「価値」を生産する日本の労働者の「窮乏」と「搾取の度が増大」している実状を表わしていると思います。実質賃金も25年間（1997年～2022年）下がり続けています（20頁の図参照）。この要因は、先述した低賃金で働かされる未組織の非正規労働者が拡大されてきたことです。日本の相対的貧困率は15・7%でOECD加盟38カ国中12番目にランクインし、日本の人口のおよそ6人に一人が相対的貧困で生活しているということになります。

雇用と賃金の側面から日本社会の現状を分析してみたわけですが、マルクスが『資本論』第一巻第七編24章第7節資本主義的蓄積の歴史的傾向に「あらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大す



るのである」(岩波文庫版第三分冊4
15頁)という記述の通りになってい
ることが確認できるでしょう。

マルクスは続けて、「また、たえず
膨張しつつ資本主義的生産過程そのも
のの機構によって訓練され結集され組
織される労働者階級の反抗も、増大す
る」と述べます。しかし、故中曽根元
首相は財政赤字を逆手にとつての三公
社の民営化を強行し、総評の中核組合
である国労を潰して総評を解体して、

連合を誕生させました。そして、労働
者派遣法や男女機会均等法を制定し、
日本的雇用形態(年功賃金・終身雇用
制)の解体をして、流動的雇用形態の
基礎を築き今日に至っています。

労働者の生存そのものが

脅かされてきた日本社会

連合は、資本の手代の役割を演じる
までに墮落し、労働組合のイメージを
失墜させました。その結果、

現在の労働組合の組織率は
17%まで低下しています。
このように「日本では労働
者が階級としての自潰現象
が生じています。資本主義
の矛盾が極限にまでに進行
しているにもかかわらず、
これをたおすことができな
いため、労働者の生存その
ものが脅かされてきた」

(『社会を変える、自分を変える』坂
牛哲郎著17頁 労働大学発行)と坂牛
労働大学前学長が指摘している通りで
す。日本の労働者はゆりかごから墓場
までブルジョアイデオロギーに汚染
(資本の粕つけ)されているために労働
者の圧倒的多数は、階級的自覚が芽
生えていないのです。これでは、「帝
国主義が社会主義の前夜である」とい
われてもピンときませんし、資本主義
を倒して社会主義を建設しようとはな
らないのです。これが日本の階級関係
の現状なのです。

司会「この現状をいかに変えるため
に、なにをなすべきか」については、
次回以降の学習と討論で明らかにした
と思います。

次回は、「フランス語版およびドイ
ツ語版への序言」を宮田北部県協事務
局長がレポートします。